

▲対談「自分史を語ろう」

館長佐木隆三がホスト役を務める対談「自分史を語ろう」を第二回に続いて開催しました。

北九州市自分史文学賞をはじめとする「自分史文学」の情報発信拠点として、様々な分野で活躍する市民の方に自分史をお話しいただいております。

【第三回】

*お話し添田裕吉さん

2月24日(日)



添田裕吉さんは、第二次世界大戦中、ルソン島での地上戦に従軍。この経験から退職後、戦没者遺族からの相談や調査に携わるようになります。これまでに受けた相談は千件、実際に戦没地へ案内した遺族は五百人以上にのぼります。

対談では主に、通信兵、臨時歩兵として目の当たりにした地上戦と玉砕の実態、戦没者調査

への思いや、遺族との交流の思い出などが語られました。

最後は、過酷な経験も含めこれまでの人生を「楽しかった」と振り返った添田さん。黄檗宗研究者で郷土史家の叔父・吉永卯太郎から贈られたという「何にでも興味を持ち何でも好きなことをやりなさい」との言葉で、対談を締めくくりました。

参加者から地上戦に関する具体的な質問や、実際に戦争で家族を亡くされた遺族からの問い合わせなども相次ぎました。

参加者 三七人

【第四回】

*お話し阿南惟正さん

3月30日(日)

ゲストは元・新日本製鐵代表取締役副社長の阿南惟正さん。館長とは八幡製鐵所時代から五十年来の友人でもあり、対談はなごやかな雰囲気の中で進みました。

阿南さんは二十八歳で社命によりブラジルへ渡航し、ウジミナス製鐵所建設に参加。海外旅行もまだ珍しかった時代に、文化や言葉の違いを越えて、海外の人々と共に働き生活した苦勞

や交流の思い出などについてお話いただきました。

「山に建設する製鐵所」を支えた日本の技術、子どもの進学のためにと必死で働く日系の



人々、おが屑で即席の畳を作った開いた柔道教室：「障害は多かったが、壁を乗り越えて人間同士仲良くなり、何よりひとつの目的を共有していた」と阿南さんは振り返ります。ウジミナスは二〇〇二年に創立四十周年を迎え、交流は今も続きます。当日、会場には当時を知る元同僚の方も多く来場され、八幡製鐵所OB二人による対談に聞き入っていました。

参加者 三五人

【第五回】

*お話し吉岡稔真さん

7月9日(水)
小倉南区出身の吉岡さんは、元競輪のスター選手。現在は解



説者として活躍しながら後進の育成にも取り組んでいます。そもそも競輪選手になろうと思っただきっかけは、父への反発の気持ちからだったといいます。

小倉競輪場での初出走では、客から罵声を浴びてプロの世界の厳しさを知り、この先どう生きていこうかと思ったそうです。怪我で苦しんだ経験も語って下さいましたが、「自分の払った税金で勝山公園はきれいになったのでは」などとユーモアを交え、会場が笑いに包まれる場面もありました。

参加者 六〇人

【第六回】

*お話し植木通彦さん

8月28日(木)

植木さんは小倉南区出身の元競艇選手。現在は日本モーター

ボート競走会の理事として後進の指導などに携わっています。

選手を目指したのは、経営していた会社がうまくいかなかった父親を助けるためでした。家族の笑顔が見たいと高校を休学し研修所に入所。厳しい訓練を経て十九歳でデビューしますが、三年後のレース中に転覆し、後続艇のプロペラに顔面を切り

刻まれる壮絶な怪我をします。しかし半年後に復帰、数々の記録を達成しました。この怪我をした時に、あと20年でレースはやめようと決意していたといいます。家族や高校の先生、競艇場のスタッフや医師、何よりもお客さんに支えられてきたという植木さん。参加者からの質問に対して、大切にしている言葉は「感謝」と答えました。

参加者 五〇人

対談「自分史を語ろう」

